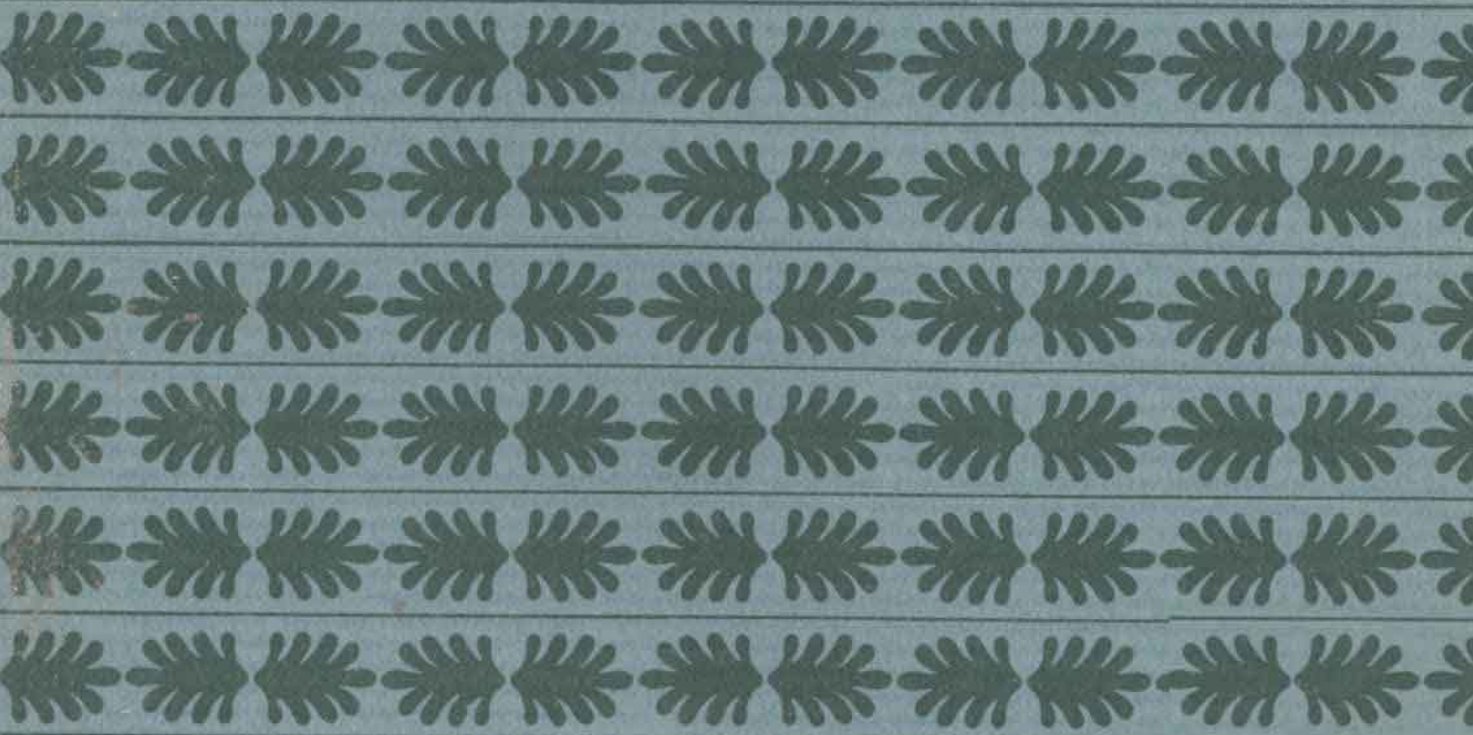


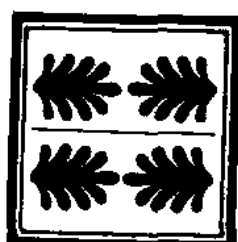
さらばモスクワ愚連隊

五木寛之



講談社文庫





講談社文庫

さらば モスクワ愚連隊
五木寛之

昭和50年11月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Hiroyuki Itsuki 1975

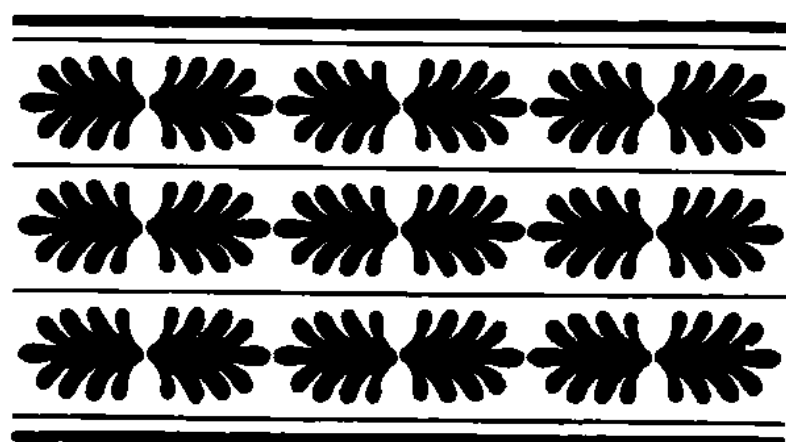
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社 文庫

さらばモスクワ愚連隊

五木寛之



講談社

目次

さらばモスクワ愚連隊

GIブルース

白夜のオルフェ

霧のカレリア

艶歌

後記

解説

五

五九

一〇二

一四七

一八七

二四二

高畠通敏
二四五

さらばモスクワ愚連隊

ソ連民間航空のTU一一四は、雲海の上を粘り強く飛びつづけていた。ハバロフスク空港を発ってから、もう六時間はたつぷり飛んだだろう。

私にとっては、ついてない空の旅だった。厚い雲海にさえぎられて、シベリアは完全にその顔を隠していた。わずかに見えたのは、離陸直後に急上昇する翼をかすめて光ったウスリー江ぐらいのものだ。

乗客の半数は日本人だった。横浜からずっと一緒にやってきた連中である。緑色の軍帽をかぶったソ連の士官や、家族連れのロシア市民たち、それに馬鹿におとなしいアメリカ人の旅行者も数人いた。チェスを指しているのもいたし、酒を飲んでいるのもいた。後席の百キロはありそうなロシア女は、爆音に負けない堂々たるいびきを周囲に響かせている。

「ニエート」

すらりと背の高い赤毛のスチュワデスがやってきて首をふった。「ノー・カメラ」

私の前の席で撮影機を窓の外に向けていた日本人乗客が、薄笑いを浮かべながら8ミリをバッグに押しこんだ。スチュワデスは指先でバッグをつまみあげると、ひよいと横の席においた。彼女は私に、早口のロシア語で何か喋った。

「もういちど、ゆっくりどうぞ」

と、私がお恥かしいロシア語で言う。英語なら商売がら、かなりこなせるのだが、ロシア語の

ほうはそうは行かない。私のロシア語は昔、同棲していたオリガから習ったものである。白系ロシアの混血娘で、竜土町のロシア料理店で働いていたオリガとは、正式の結婚はしなかったが、三年も一緒に暮した。もうずっと昔、私がジャズ・ピアノリストとしては、まだ食って行けなかった頃のことだ。

オリガはいい女だった。見かけだけじゃなく、気だての方もとても良かった。彼女は稼ぎのないくせに気位ばかり高い私が、一般受けしないスタイルの演奏に頑固にしがみついていることに、ちっとも不平を言ったりはしなかった。くたくたになるまで働いて帰ってきて、それから私の身の回りの世話をやくのが楽しそうですらあった。掃除もきちんとやり、シーツにアイロンを当て、いつも手づくりの料理を食わせてくれた。しいて彼女の欠点をあげれば、私が疲れていようがいまいが、ほとんど毎晩のように、あのことを求めたことと、私にロシア語を無理やり教え込もうとしたことだ。

彼女は私と、夜、ベッドの中でロシア語のお喋りをすることを好んだ。彼女は自分が生まれたというハルビンの街の話を、くり返し私に話してきかせたものである。私はなにかひとつ位オリガをよろこばせてやりたいという殊勝な気持から、できるだけロシア語を熱心におぼえようとつとめたものだ。つまらない事で彼女と別れてから、もうかなりたつが、それでもロシア語を聞くと胸の奥がかすかにひきつるような感じがある。私はやはりオリガを本当に好きだったのかも知れない。今ごろになって気がついて、もう取り返しつかない過ぎ去った事なのだが。

同じ注意を三度もさせないで欲しいとこの人たちに伝えてくれ、とスチュワデスは私に向って言った。この人たちは公式代表団員でスチリヤーガなんかじゃないんだから。

「スチリヤーガというのは何だい？」

と、私はたずねた。彼女は呆れたように肩をすくめると、そのまま行ってしまった。

モスクワまで、あと二時間。窓の外は相変らず明るいままだ。私はシートを倒し、サングラスをかけて目をつぶる。機体を抜けてくる震動に身をまかせながら、今度のモスクワ行きのことを考えた。

妙な仕事に首を突っ込んだものだ、と私は思う。何しろソ連人民相手にジャズの興行を打とうというんだからな。おかしな話だ。

今度のソヴェート訪問のお膳立てをととのえたのは、大学時代の友人である日ソ芸術協会の森島だった。大学の頃、彼は学生運動に熱中していたし、私のほうは何となくその日を送っていた意識の低いジャズ気遣いの学生だったのだが、彼も私と同じように、授業料が払えず抹籍処分をくらった組である。学校を追い出されると、お互い、やがてアルバイトがそのまま本職になってしまったのだ。私は知り合いのバンドにもぐり込んで本気でジャズをやりだしたし、彼は労働組合の専従とやりに就職した。あれはたぶん、朝鮮の戦争が終った翌年ぐらいのことだったように思う。

それから五年ほどたって私たちは思いがけず再会した。彼は組合問題についての本を書いていると言っていた。そして私は自分のバンドを持って仕事と人気の波に追われていた。しかし、実際にはお互いに何かしら行き詰り、精神的に迷っていた時期だったようだ。その時、私たちは歩道の端で立ち話をしただけで別れた。

それからしばらくして彼は葉書をよこし、組合運動をやめて株屋になったと知らせてきた。私

はその返事に、近々自分はピアノを捨てて芸能ブローカーに転向するつもりだと書いてやったのだ。

事実、それから間もなく私はジャズをやめ、ステージを降りた。そしてあらたに興行関係の仕事を始めた。その仕事は奇妙にうまく行って、三年目には事務所も構え、やがて国際プロモーションを設立して代表におさまった。

興行関係の仕事で、私が人々を驚かせるような成功をおさめたのは、決して仕事に対する熱意や努力のたまものではないだろう。むしろそれと反対のもののためではなかったろうか。ピアノを捨て、ステージを降りたことは、私にとって人生を降りてしまったことと同じだった。当時の私は、すでに失うものを何ひとつ持っていなかったと言っている。今にして思えば怖さを知らぬ投げやりの強気が、私をここまで押しあげたのである。同業者たちが二の足をふむ危険な企画を、私は醒めた心で片っぱしから手がけ、そして当てたのだ。

平均年齢六十四歳という絶望的な黒人バンドをニューオーリンズから呼んだ時も、そうだった。業界では嘲笑よりむしろ同情の声が聞かれたほどである。だが、私はそれに賭けた。そして、わずかな赤字こそ出したものの、予定通り一カ月の全国巡演を打ちあげたのだ。

その頃の私は、ひよっとすると無意識のうちに破滅を求めていたのではないかと思う。そして興行という仕事に、その自分の行きどころのない苛立ちを賭けていたのではあるまいか。

そして森島がああ葉書をよこしてのち、再び私の前に現れたのは、つい数カ月前のことである。お互いに三十代にようやく踏みこんだばかりだった。そのくせ二人とも、すでに高価なダブルの背広がすっかり身についた感じの男になっていた。彼の名刺には、日ソ芸術協会理事という

物々しい肩書きまであった。

「お前のことはよく聞いているよ。呼び屋としちゃ一流だそうじゃないか」

と森島は私の名刺をひねくり回しながら言った。「そこで少し頼みがあるんだ。まあ、どこか静かな場所でゆっくり話そう」

彼は私を四谷の古い名の通った料亭へ連れて行った。そして、そこで森島はいささか毛色の変った話を持ち出したのである。それは私にとって、かなり意外な提案だった。

最近、ソヴェートで日本のジャズ・バンドを呼びたがっているんだが、と彼は切りだしたのだ。彼の主宰する日ソ芸術協会は昨年設立以来、日本のアーチストをソ連に紹介する仕事をつづけてきたという。古典芸能や民族舞踊、また合唱団などの公演も手がけてソ連各地で非常な好評を博しているのだそうだ。だがソ連側のジャズ・バンドを送れという今度の注文には正直言って頭を抱えてしまったらしい。何しろ全く畠ちがいの代物だけに見当がつかなかったのだろう。

そこで、と森島は私を挑むような微笑で見つめながら言った。

「窓口は俺の協会扱いということで、どうかね」

「実質的なプロモートを頼む、というわけか」

私はぼんやりと庭を眺めながら言った。「いま即答はできんな」

わかってる、と森島はうなずいて、

「まずこつちの内容や銀行を調べたうえで改めてお話を伺いましょう、というところかね。ま、いいだろう。それがビジネスの常識ってもんだからな」

この野郎、と私は思った。見えすいた挑発だ。私はそしらぬ顔で、有力な興行会社であるNプ

ロやA企画センターには話は持ちこまなかったのか、ときいた。彼は苦笑して答えた。

「実を言っと、両方とも断られた。それでお前のところへ持ちこんだんだ」

「なるほど」

乗ってやろう、とそのとき私は唐突に思った。不動産業や学校経営にまで手をひろげ始めているNプロやA企画センターに対する反発も、多少はあったに違いない。その晩、森島と私は少し酒を飲み、競馬の話などをして、別れた。

翌日、私はその仕事を引受けると森島に電話で伝え、数日後に事務所で業務に関する簡単な覚え書を取り交した。そして、森島が帰った後で、私は日ソ芸術協会の信用調査を電話で依頼した。

調査書は三日後に届いた。銀行筋の信用は予想通り、余りかんばしいものではなかった。だが意外だったのは、会長をはじめ役員の間違ったポストに五井物産ほか、旧財閥系商社のお偉方が数人顔を連ねていたことである。私は反対の側の革新団体のスポンサーを考えていたのだが、いずれにせよ、それは私にとってはどうでもいい事だった。誰の懐から出ようと金に変わりはないのだ。

そしてその後、仕事はかなり順調に進んでいった。送り出すメンバーの編成も、思ったより楽にまとまりそうだった。当然のことだが、不況の波は、本格的なジャズをやっている連中のほうに厳しく押し寄せてきているようだった。実力ではNO・1と言われているサックス奏者が自分で売り込みに来たりもした。ビッグ・バンドはテレビの歌謡番組の伴奏で何とか食いつないでるらしい。だが、好きな演奏のスタイルを守りつづけている小さなグループは、かなり無理なエキストラにも顔を出しているらしかった。

やがて五月の末に急に森島から、現地へ行ってみてくれ、と言ってきた。公演は九月だったが六月中にモスクワで打ち合わせをやって欲しいという話だった。私はレパートリーの決定や構成の面で迷っている所だった。ロシアの聴衆がいったいどんなジャズを聞いたがっているのか、それが知りたいと思っていた。ちょうどいいタイミングだったので、私はそれをOKした。

私は夏休みをかねて、モスクワへ行くことに決めた。当の相手であるソ連対外文化交流委員会と、日本大使館の担当者との意見調整を終れば、十日余りの休暇が楽しめる。帰りはコペンハーゲンへ回って、SASで東京へ直行すればいい。そんなわけで山積みしたスケジュールを強引に整理してしまうと、私は六月十日横浜発のソ連船舶公団船バイカル号で、ナホトカへ向け出発したのだ。ナホトカからハバロフスクへは鉄道で、そこからTU一一四で一気にシベリアを越えるというコースに私は惹かれたのだった。

ロシア語のアナウンス、つづいて訛りの強い英語のアナウンスが響いた。間もなくモスクワ上空へ到着。禁煙の赤ランプがつく。

私は体を起こして窓の外を眺めた。巨大なエンジンを抱えた主翼の先が、不意に激しくしなうのが見える。八個の逆回転するダブル・ターボ・エンジンは、快調なテンポで迫力のあるジャム・セッションをやっていた。他の乗客たちにとっては、それは只の騒音に過ぎまい。だが、その轟音が時おり微妙に音階を変え、転調するのが私にはわかる。

機体を抜けてくるその爆音に耳を傾けているうちに、なぜか重苦しい不安が心の隅で魚の尾びれのように動いたのを、私は感じた。いやだな、と私は思った。それは覚えのある不吉な予感

だった。こんなふうになると、ろくなことはない。

不意に機体がゆれた。激しくしなう翼の先に、厚い陰惨な雲の壁が迫って見えた。TU一二四は、その暗い壁に正面から突っこんで行こうとしていた。その時、さっきの予感的中した。深い所に閉じこめておいたはずのピアノの音が、噴水のように目の前にふきあげてきた。

それは突然、何かの拍子に引きおこされる激しい鬱状態のイントロだった。私がステージを降りてから、年に一度か二度、こいつがやってくる。私にはその病氣の原因も治療法も判っていた。必要なのは音だった。

靴先で軽く床をたたく出の合図。さり気ない導入部の数小節。滑りこんでくるクラリネットとトランペットの同調の合奏。そして、思わず声をかけずにはいられない感動的な独奏の受け渡し。心臓の鼓動をおもわせるベースの底深い唸りと、旋律の流れを鋼鉄のタガのように締めあげるドラムのリズム。しだいに熱く、さらに激しくふくれあがる血管。それが今にも破れようとする瞬間、一斉に吹きあげる最後の合奏。ため息のような終結部のあと、一瞬の間を置いてあふれだす客席の興奮。したたる汗と仲間同士の目くばせ。微笑と、爽かな疲労。

だが、それはもはや私が再び帰って行くことのできない過去の世界だった。私が一言、入れてくれ、と言えば昔の仲間はいつだって喜んで弾かせてくれただろう。だが、私にはそれはできなかった。私はジャズを愛し過ぎていたのだ。かつて私がつくりだした、あの自分で納得のいくブルースの音を、私の指はもう弾くことができない。私に本当のジャズを弾かせた何かが、今は私の中から失われてしまっているのだ。五年前のあの夏のおわりに、何かがこわれ、気がついた時にはすっかり錆びついていたのだ。それに気づいた時、私は人生を降りた気でステージ

を降りたのである。

録音の終わったスタジオで、私がピアノをやめてマネイジメントをやると突然宣言した時、メンバーは皆、黙って楽器をいじっているだけだった。連中は私と同じようにジャズを愛していた。そして私の決心の背後にあるものを、彼ら全部が感じ取っていたのだらう。私は仲間が口先だけの止めたてをしない事が嬉しかった。正直に言って誰か一言ぐらい何か言うのではないか、とは思ってはいた。それだけに或る意味でつらい嬉しさだったと言いなおすべきだらう。

私は当時注目され始めていた新人を後釜にすえる事を皆にすすめたが、それだけは誰にも受け入れられなかった。彼らは当時、かなり売りこんでいた私たちのバンド、ブルー・デュークスを解散し、散り散りに他のバンドへ移って行ったのだ。連中は私の退職金がわりに、彼らとファンの全てが愛していたバンドの名前を私に贈ってくれた。ブルー・デュークス。一文にもならない代物だったが、私にとっては何物にもかえ難い大切な記念品である。

その夏の最後のステージを終えたあと、私たちは人気のない客席に降りて、清酒とスルメで一杯やり、聴き手のいない演奏を一曲やって別れた。ニグロの吊いの行進を真似て、ブルースをやりながら一人ずつ消えて行った。皆の姿が消えると、私はピアノのふたをしめ、管理人に挨拶して最後に建物を出たのだった。

機体が傾いた。エンジンの音が急に力を失った。短い衝撃と数回のバウンド。どこかでコップの割れる音がした。女の悲鳴と、早口のアナウンス。TU一一四は、百七十人の乗客をのせ、七千キロを飛んで、今モスクワに着いたのだ。

空港の待合所の前には国営旅行社のマイクロバスが私たちを待っていた。ドモヂェードヴォという名のこの空港は、最近モスクワに出来た四番目の空港で、ソ連最大のものだという話だった。まだ拡張中らしく、ブルドーザーがまるで巨大なバリカンのように、見事な白樺の原生林を切り開いて行く。滑走路のそばに数頭の牛がねそべっているのが見えた。

バスは時速百キロは出てるだろうと思われるスピードで、白樺林の中の直線道路を走り続けた。しばらくすると、お伽の塔のような奇妙な高層ビルと市街が見えてきた。モスクワの街は雨だった。六月の半ばというのに、まだ肌寒い感じなのだ。

国営旅行社が私に割り当てたのは、ホテル・ナショナルという恐しく古風なホテルだった。広場をへだてて歴史博物館の真赤な建物があった。その背後、右手にクレムリンの胸壁と高い塔が見えた。

私を通されたのは、天井の高い清潔だが殺風景なツインの部屋である。三食付き一日十四ドルのペンション・クラスとしては、まあまあのものである。

少し疲れていた。靴のままベッドにひっくり返っていると、突然、机の上で電話が鳴った。受話器をとりあげると、齒切れのいい日本語が響いてきた。

「北見さんでいらっしやいますね。こちら大使館の白瀬ですが」

「はあ。これはどうも」

と私は間の抜けた返事をした。白瀬という大使館員のことについては森島から聞いていた。今度の仕事の面倒を見てくれる大事な男だという話だった。それにしても、着く早々、向こうから電話をくれるとは意外だった。相手のことを、エリートコースを突っ走っている典型的な外務官